

IAUD Newsletter vol.12 第 7 号(2019 年 10 月号)

1. CM 字幕プロジェクト アンケート調査実施報告	1
2. UD+プロジェクト 先進事例視察実施報告	5
3. 「IAUD 国際デザイン賞 2018」受賞紹介⑦	8
4. 「第 3 回 IAUD 学生コンペ」応募受付中	11
5. IAUD 10 月の予定	12

字幕付 CM の更なる普及のために

活動報告:CM 字幕プロジェクト アンケート調査実施

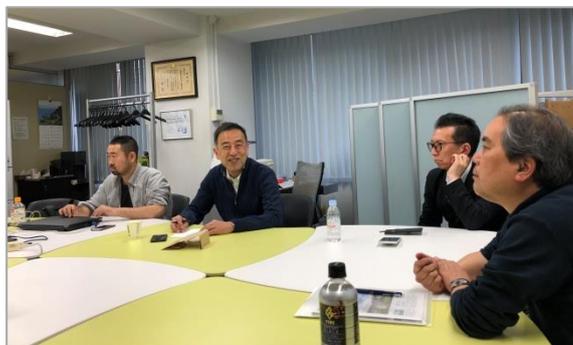
CM 字幕の普及を目的に活動している CM 字幕プロジェクト※は、2019 年 1 月 1 日(火)から 3 月 31 日(日)までの 3 か月間、聴覚障害者や難聴者を対象に、字幕付 CM や動画、メディア接触状況など商品情報入手に関するアンケート調査を実施しました。

回答内容を分析したところ、情報取得先メディアとしてスマホが 1 位に。一方、テレビは僅差で 2 位に挙げられ、依然として重要なメディアであることが分かりました。

また、今後 CM に字幕を付与してほしい業種として、オリンピック・パラリンピック、食品、家電などが挙げられ、対象者の情報欲求の実態が見えてきました。

今号の Newsletter では、アンケート調査の実施概要を同 PJ の高橋雅尚主査が報告します。

※9 月より余暇の UD プロジェクトは CM 字幕プロジェクトに名称を変更しました。



CM 字幕プロジェクト会合の様子

聴覚障害者・難聴者のメディア利用実態を調査

現在、約 20 社が CM に字幕を付与しています。しかし、話題の CM が増える一方で、字幕付 CM はまだ少ないのが現実です。

そこで、CM 字幕 PJ は字幕付 CM や動画などの更なる普及につなげるため、アンケート調査をインターネットで実施しました。

設問は 10 問、聴覚障害者(身体障害者手帳を持っている人)、難聴者(身体障害者手帳は持っていないが、聞こえにくさを感じる時がある人)、聴者(聴覚に問題なし)を対象に実施したところ、計 1,247 人(聴覚障害者 652 人、難聴者 82 人、聴者 513 人)から回答をいただきました。

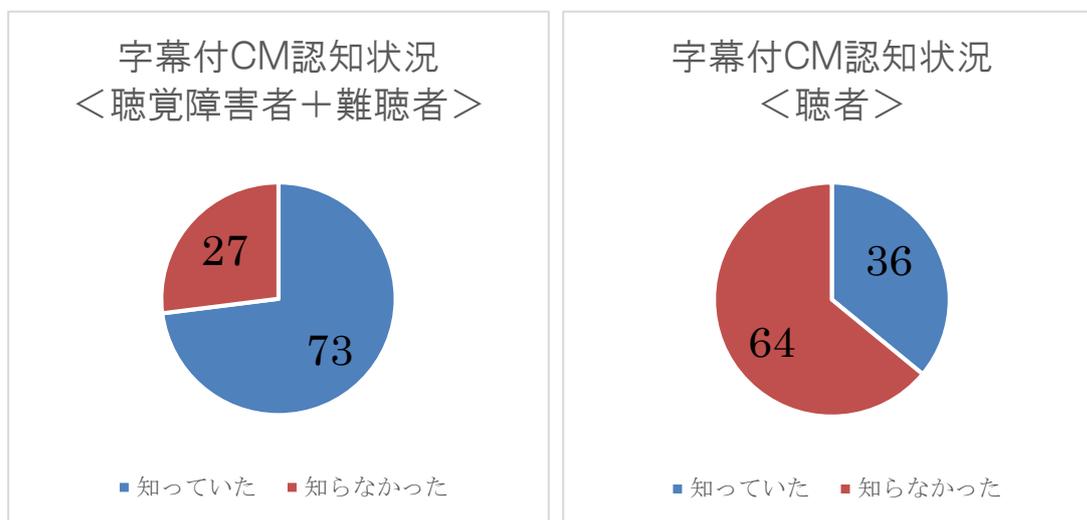


インターネット上で実施されたアンケート調査

字幕付 CM 認知は一般的に低い

「あなたは一部の CM に字幕がついていることを知っていましたか」と聞いたところ、聴覚障害者・難聴者の約 73%が「知っていた」と回答しました。

一方、対する聴者は約 36%にとどまり、字幕付 CM がまだまだ一般的には知られていないことが分かりました。

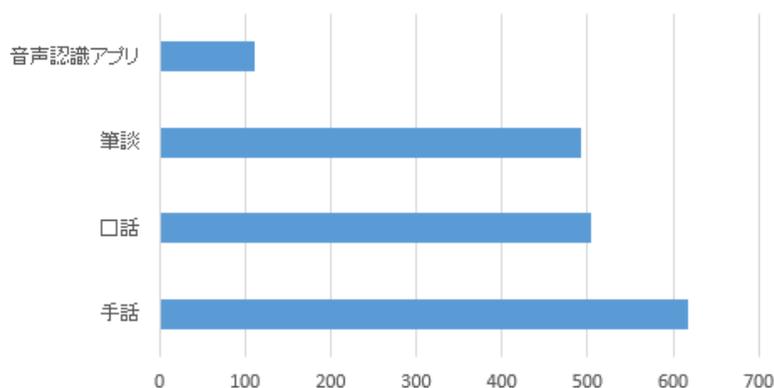


字幕付き CM 認知状況

コミュニケーション手段に音声認識アプリ

聴覚障害者・難聴者に「あなたのコミュニケーション手段は何ですか」と聞いたところ、「手話」や「筆談」の中に、約 7 人に 1 人が「音声認識アプリ」を使っていると答えました。

新しいテクノロジーがどう受け入れられていくのか、今後の調査を重ねていく中で変化を観察していく予定です。

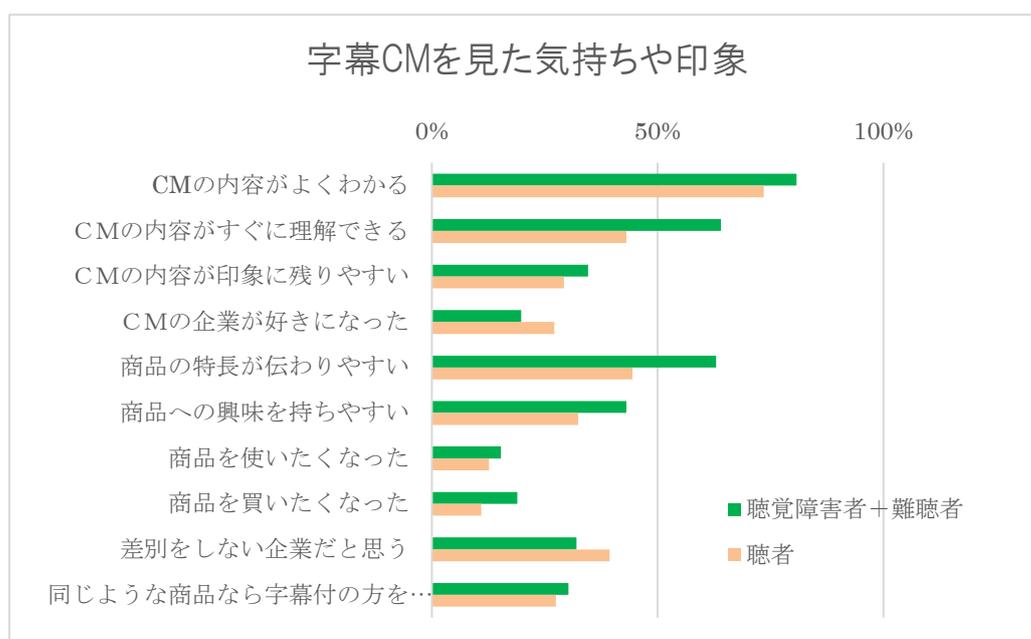


聴覚障害者・難聴者のコミュニケーション手段

字幕付 CM で企業選択度や好意度がアップ

アンケート上で実際に放映されている企業の字幕付 CM を閲覧してもらい、「この字幕付 CM を見た気持ちや印象は」と聞いたところ、CM 自体の内容や理解に大きく影響を及ぼし、特に聴覚障害者・難聴者への特長伝達力の強さが明らかになりました。

また、差別をしない企業と感じたり、商品を使用したり購入したくなった人は約 3 割に留まりました。商品の使用や購買意向は字幕が付与されたからといって反応せず、CM 内容自体の事に起因すると思われる。



聴覚障害者・難聴者は商品情報をスマホから

聴覚障害者・難聴者に、「あなたは普段どこから商品情報などを得ていますか」と商品を購入するときの情報収集先を聞いたところ、1 位「スマートフォン」、2 位「テレビ」、3 位「雑誌」、4 位「カタログチラシ」、5 位「店頭」が挙げられました。

時代変化により、「テレビ」を「スマートフォン」が逆転。ただし、「テレビ」も僅差で挙げられており、依然として情報元となっています。

また、情報収集先としての「店頭」については、聴者の 3 位に比べて聴覚障害者・難聴者は 5 位でした。これは、聴覚障害者・難聴者が店頭でコミュニケーションがうまくとれず、事前にスマートフォンなどのメディアを通して情報収集を行い、最低限のやりとりだけで済ませたい、という気持ちがあるかもしれません。

聴覚障害者+難聴者	聴者
1、スマートフォン	1、テレビ
2、テレビ	2、スマートフォン
3、雑誌	3、店頭
4、カタログ／チラシ	4、雑誌
5、店頭	5、カタログ／チラシ

商品情報の入手先

もっと情報がほしい業種は「オリンピック・パラリンピック」

「CM や動画に字幕が必要だと思う会社を選んでください」と聞いたところ、聴覚障害者・難聴者は1位「オリンピック・パラリンピック」、2位「食品」、3位「家電」、4位「通信会社」、5位「旅行」を挙げました。

一方、聴者は1位「食品」、2位「オリンピック・パラリンピック」でした。

CM は日々の話題や暮らしに必要な情報となることが多く、対象者は、聴者(家族)との情報格差を感じているため、字幕付与を通じた対等な情報手段を得たい気持ちが見て取れます。

聴覚障害者＋難聴者	聴者
1、オリンピック・パラリンピック	1、食品
2、食品	2、オリンピック・パラリンピック
3、家電	3、保険
4、通信	4、公共
5、旅行	5、通信
6、保険	6、日用品

CM や動画に字幕が必要だと思う会社

字幕は生活に必要不可欠

設問以外に他の意見を伺ったところ、聴覚障害者の冠婚葬祭・病院・医療関係など人生の中で必要不可欠なものや、選挙や政治関連の広告放送など社会参加においても、字幕などの文字情報が必要だ、との意見があり、聴者と対等の情報保障がなされているべきという要求を強く感じました。

さらに、CMにおいて「字幕はつけて当然」(聴覚障害者)、「どんなCMでも内容を知るため字幕をつける必要がある」(聴覚障害者)、「聞こえる人と聞こえない人に情報格差があってはいけない」(聴者)、「全てのものに字幕がついているといい。言葉は読み取るほうが分かりやすいこともある」(聴者)、といった意見もありました。

情報格差の無い社会へ

今回のアンケート調査を通じ、CM だけでなく多くのメディアを通じて流れる情報において、聞こえる人も聞こえない人も対等に情報を得られる環境整備が必要であると強く感じました。

外国ではテレビ番組やCMにもほぼ字幕が付与されている例を多く見ます。一方、日本では、番組には字幕が付くようになりましたが、CMにはまだほとんど付いておりません。

「東京2020年オリンピック・パラリンピック競技大会」を控え、さまざまなメディアにおいて、多言語対応はもちろんのこと、聴覚障害者への情報格差も無くしていくべきでしょう。

特に、CMは企業の責任として字幕を付与し、あらゆる人に情報を伝えていく必要性があります。

今後もアンケートや意見交換会を行いながら意見をまとめ、社会に訴求していきたいと考えています。

※今回のアンケート調査結果に関して、9月17日(火)の産経新聞大阪地域面(朝刊)及び下記の産経新聞Webサイトに掲載されました。

<https://www.sankei.com/life/news/190918/lif1909180013-n1.html>

<https://www.sankei.com/west/news/190918/wst1909180034-n1.html>

人生 100 歳時代の未来にあるべき住まい

活動報告:UD+プロジェクト 先進事例視察実施

研究部会は、モノの視点だけでなくコトの視点での UD 具体策を様々な分野・業種からの広い視点で研究するために、2019 年度より住空間プロジェクトとワークスタイルプロジェクトを 1 つにまとめて「UD+(ユーディープラス)プロジェクト」を立ち上げました。

そして、視点構築のために UD 先進事例視察を 8 月 27 日(火)にコンセプトホーム「～人生 100 歳時代の未来住宅～五世代」(埼玉県越谷市)で実施しました。

当日は他の研究部会メンバーを含む 10 人が参加し、視察後にはワークショップも行い、活発な意見交換が行われました。

今号の Newsletter では事例視察の様子を同 PJ の宮脇伸歩主査が報告します。



活発な意見交換が行われたワークショップ

テーマは楽しい UD、UD+の研究

UD+PJは今年度の活動目標として、2025 年の超高齢社会に向けた「楽しい UD、UD+の研究」をテーマに掲げています。

「モチベーション×生活・環境・機会(きっかけ)=UD+」という概念を基盤として活動を推進し、2025 年までに「これからの日本のコミュニティ」プロトタイプ制作を目標に、刺激を与え機能低下を防ぎ向上させる、社会との関わりを拡大し自立的な生活を実現する、といった新たな UD のあり方を研究しています。

その一環として、全国各地の先進事例視察を実施し、UD+の視点から考察を行い、従来の分野を横断する新たな UD 視点を構築します。

五世代 4 世帯が元気に暮らせる家

今回視察したのは、2025 年の生活を見据え、人生 100 歳時代に五世代 4 世帯の家族がともに元気に暮らせるコンセプトホーム「～人生 100 歳時代の未来住宅～五世代」のモデルハウスです。LIXIL グループで住宅フランチャイズチェーン事業を展開している株式会社 LIXIL 住宅研究所が、2018 年 7 月に公開しました。

このコンセプトホームは、五世代が各世代に合った別々のユニットに住みつつも、一つ屋根の下に小さなコミュニティを形成して、お互いを見守り助け合って、みんなが元気に暮らせる提案をしています。

五世代が元気に暮らしていくために、「4 世帯がつながる家」「IoT で進化する家」「からだを鍛える家」「未来に受け継ぐ家」という 4 つの提案を盛り込んでいます



コンセプトホーム

「～人生 100 歳時代の未来住宅～五世代」

人とのつながりを大切に暮らす

「4世帯がつながる家」では、人生100歳時代を見据え、生き方や暮らし方の変化に対応し、世代や世帯を超えてライフステージの変化に合わせて住まい方を変えられる提案をしています。

独立して暮らしながら、無理せず自然にお互いを見守り、助け合える暮らしを実現するために、家の中央には生活を共有するスペース「コネクティング・フロア」を設けています。

また、家族を25歳世代(子育て世代)、45歳世代(働き盛り世代)、65歳世代(充実世代)、85歳世代(高齢者世代)の4つに分け、各世帯には「レベル差(段差)」によって分けられた独立したスペースを設けています。

各世帯の生活スペースを充実させると共に、共有スペースには大きな吹き抜けを設けることで、開放的で皆が集まりやすい空間となっています。

IoT技術を活用した安心・便利な暮らし

「IoTで進化する家」では、スマートフォンやタブレットを通して家電製品や玄関ドアの施錠が遠隔操作できる、安心・便利な暮らしを提案しています。

また、画面に現れるコンシェルジュに話しかけるとアドバイスを得られる新しいデジタルコミュニケーションツール「Mirror Concierge(現在開発中)」により、住まう人の健康や快適な住生活をサポートしています。

家族と一緒に家の中で運動できる

「からだを鍛える家」では、東京大学大学院の深代千之教授監修のもと、子どもの「**運動神経***」を高め運動の基礎となる動作を学べる運動プログラムを家の中で行える提案をしています。

高齢者に関しては、あえて段差を設けて生活の中で昇り降りする機会を作るなど、日常生活を送ることがそのまま、からだに強い負担をかけない運動になるようにしています。また、手すりや雲梯を設置して、健康維持につながる運動プログラムも設けています。

さらに、健康維持をサポートする室内環境を作るため、建物内の空気と湿度を管理する様々な工夫もしています。

※運動神経は深代教授が提唱する、運動も勉強もできる脳を育てる考え方です。

様々な災害から命や財産を守る

「未来に受け継ぐ家」では、多世帯が末永く住み継いでいくことができるために、耐震+制震システムなど様々な災害から命や財産を守るための安全・安心の工夫を盛り込んでいます。

また、再生可能エネルギーとなる太陽光発電や蓄電池を備えた、電気代ゼロの住まいを目指しています。

さらに、LPガスを設置することで、万が一ライフラインが途絶えた時にも炊き出しが可能となり、地域の避難所として活躍することができます。

事例からモノとコトの UD を考察

視察後、「コネクティング・フロア」をお借りして、気づきを抽出するワークショップを行いました。

UD+PJメンバーで住居(環境)=モノのUDについて、その他の研究部会メンバーでソフト(モチベーション)=コトのUDについての気づきを抽出し、ワークショップの最後で発表することで共有しました。

以下に主な気づきの概要を記載します。



コネクティング・フロアでのワークショップ

モノ(環境)のUDについての気づき

良い点:

- ・収納をあえて極少にし、モノを持たない暮らしに誘導している。
- ・過去のコンセプトハウスはロボット、今回はコンシェルジュ。人との関係のノウハウの積み重ねを感じる。
- ・あえて段差を付ける、階段を上がって寝室があるなど、日常での適度な負荷を盛り込んでいる。
- ・響かない床やボールをぶつけられる壁など、思い切り動ける工夫がある。
- ・二酸化炭素濃度チェックや輻射熱での温度コントロールなど、自然な環境制御がある。

考慮すべき点:

- ・運動した結果や体のコンディションによって、褒めてくれるともっと頑張れる。
- ・4世帯が共に暮らしてこそその経済的メリットとなっている。
- ・様々な機能が装備されているが、解り易い説明が求められる。
- ・情緒的な工夫(インテリアを変える、音楽を加えるなど)の付加が必要。

コト(モチベーション)のUDについての気づき

良い点:

- ・家族が集まる仕組みがある。
- ・リビングの大きなテーブルは各部屋から見通しの良いリビングで家族が集う仕掛け。
- ・家族の記念日を祝う、個々の趣味を一緒に楽しむなど、共通の話題を創造する仕掛け。
- ・広いリビングや運動のできる庭など、各世代の付き合いを活かし平常時から開かれた暮らしが期待できる。
- ・リビングの大画面モニターで、リアルな交流以外にも遠隔地などとのデジタルを用いた交流も可能。
- ・全てをバリアフリーにすることなく、積極的に体を動かすことで健康増進・健康寿命を延ばす仕組みがある。(雲梯、コンシェルジュ、抗アレルギー素材を用いた床、自然な空調など)

考慮すべき点:

- ・共通の空間仕様だが、個性を反映したり、趣味を楽しむ空間の仕様に変更できる仕組みがあると良い。
- ・多世代の世代間の生活時間が大きく異なる中で、交流を成立させる仕掛けが必要。
- ・10代と70代以上の10年間の変化の差が大きい。長期の時間差を取込む工夫が要る。
- ・新たな家族の役割分担として、家族の能力、生活時間に応じた共同生活での基盤構築が想定される。
- ・そもそも異なる世代の家族と一緒に住みたいか。異なる世代が同居しようとするきっかけとは何か。

新たな UD 視点の構築を

今後も先進事例の視察を通じて UD+の視点から考察を行い、従来の分野を横断する新たな UD の視点の構築を目指していきたいと考えています。

※コンセプトホーム「～人生 100 歳時代の未来住宅～五世代」詳細は[こちら](#)をご覧ください。



事例視察に参加したメンバー



革新的な UD 活動や提案を表彰

「IAUD 国際デザイン賞 2018」受賞紹介⑦

「IAUD 国際デザイン賞 2018」受賞紹介の 7 回目は、プロダクトデザイン部門金賞の三菱電機株式会社「病院向け引き出し式電子冷蔵庫」です。

IAUD 国際デザイン賞 2018 審査委員会のロジャー・コールマン委員長(英国王立芸術大学院名誉教授)は「病院向け引き出し式電子冷蔵庫」について、「患者や臨床医、看護人との細部にわたる面談が、入院患者のための個人用冷蔵庫の機能設計と人間工学の両面に息吹を吹き込み、その審美性にも影響を与えた。その結果、非常に使いやすいデザインが誕生した」と高く評価しました。

今号の Newsletter では「病院向け引き出し式電子冷蔵庫」の取り組みを三菱電機(株)の荒井秀文氏に報告していただきます。

※「IAUD 国際デザイン賞 2018」受賞結果と審査講評の詳細は下記のリンクをご覧ください。

[IAUD 国際デザイン賞 2018 受賞結果発表](#)

[IAUD 国際デザイン賞 2018 審査講評](#)

※「IAUD 国際デザイン賞 2018」受賞紹介①②③④⑤⑥は下記 Newsletter をご覧ください。

[IAUD Newsletter vol.12 第 1 号\(2019 年 4 月号\)](#)

[IAUD Newsletter vol.12 第 2 号\(2019 年 5 月号\)](#)

[IAUD Newsletter vol.12 第 3 号\(2019 年 6 月号\)](#)

[IAUD Newsletter vol.12 第 4 号\(2019 年 7 月号\)](#)

[IAUD Newsletter vol.12 第 5 号\(2019 年 8 月号\)](#)

[IAUD Newsletter vol.12 第 6 号\(2019 年 9 月号\)](#)



患者と面会者、ケアスタッフの要件を満たすデザイン

「IAUD 国際デザイン賞 2018」金賞受賞:「病院向け引き出し式電子冷蔵庫」 三菱電機株式会社

患者さんの負担を軽減する製品を目指して

病室で使用される冷蔵庫は、肉体的にも精神的にも苦痛の多い入院患者さんが、病室での時間を少しでも快適に過ごすために設置されています。

しかし、現状の病室では、小形の一般冷蔵庫が使用されるケースも多く、いくつもの課題がありました。

例えば、庫内を覗き込むために腰をかがめる必要があることや、不自由な手では扉を開けにくいこと、運転音に対する配慮がないことなどです。

そこで、病院関係者や入院経験者へのヒアリングをもとに課題をひとつひとつ丁寧に解決することで、できるだけ多くの患者さんの負担を軽減する製品を目指しました。



病院向け引き出し式電子冷蔵庫

けがや病気の人に配慮した使い勝手

開閉用のハンドルには上下に貫通した持ち手を配置し、けがや病気などで手を動かすづらい人が、上下どちらからでも手がかけられるようにしました。

また、貫通部は、紐などが装着しやすく、指先が使えない人へも配慮した形状となっています。



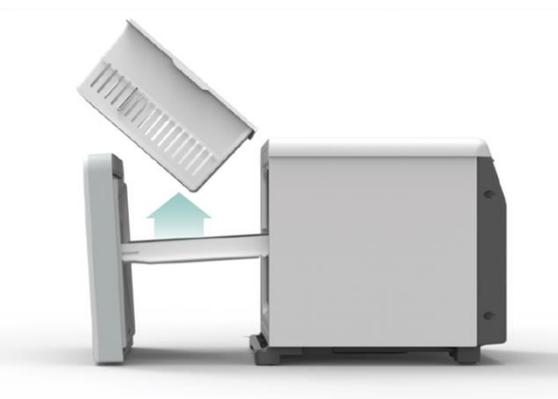
開け閉めしやすいようデザイン

更に、引出し式の開閉スタイルは庫内を上から一覧しやすく、車いすやベッドからでもかかむ必要のない楽な姿勢での食品の出し入れを可能としています。

また、庫内のバスケットは簡単に取り外しが可能で、丸洗いができます。



上からでも庫内が見やすい引き出し式の開閉スタイル



丸洗いができる庫内バスケット

くつろぐ時間や睡眠を邪魔しない静音性

電子式の冷却方式を採用し、病院のベッドサイドに設置しても、患者さんのくつろぐ時間や睡眠を邪魔しない静音性を実現しています。



電子式の冷却方式で静音性を実現

安心と優しさを感じさせる形状とカラー

ベッド横収納棚から飛び出しのないフラットなデザインで、患者さんや看護婦さんにぶつかる危険を防ぎます。

また、患者さんの気持ちに配慮し、長期の入院でも飽きがこず、やさしい印象のペールトーンカラーを採用しました。



安全な形状と優しい印象のカラーにデザイン

病室での快適性向上にむけて

入院経験者へのヒアリングで、「入院中はちょっとしたストレスが大きなストレスになっていく」という意見が多くありました。

この冷蔵庫は病室の中の小さな道具の一つですが、患者さんのストレスを軽減し、少しでも快適に過ごすための一助になることを願っています。



締切間近！これからの理想の暮らしと住まいを考える 第3回 IAUD 学生コンペ「2025年以降の日本の暮らしと住まい『UDプラス』のプロトタイプを考える」応募受付中

誰もが心豊かに暮らせる暮らしと住まいづくりを目標に、「楽しいUD」の実現を目指しているUD+プロジェクトは、学生の皆さんにフレッシュで斬新な提案を募る第3回IAUD学生コンペ「2025年以降の日本の暮らしと住まい『UDプラス』のプロトタイプを考える」を実施します。

このコンペは大学、専門学校の学生が対象で、審査料は無料です。グランプリには賞金5万円が授与されます。

応募締め切りは10月7日(月)です。皆様の応募をお待ちしております。

- ※「第3回IAUD学生コンペ」の詳細は[こちら](#)をご覧ください。
- ※「第1回IAUD学生コンペ」の審査結果は[こちら](#)をご覧ください。
- ※「第2回IAUD学生コンペ」の審査結果は[こちら](#)をご覧ください。



第1回IAUD住宅学生コンペ表彰式の様子(東京・秋葉原)

月	火	水	木	金	土	日
	1	2	3	4 13:30~ CM 字幕 PJ @IAUD サロン	5	6
7 第3回 IAUD 学 生コンペ 応募締切	8	9	10	11 15:00~ UD+PJ 事例視察 @リゾートトラスト	12	13
14 体育の日	15	16	17	18	19	20
21	22 休日(即位礼正 殿の儀)	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

次号は 11 月上旬発行予定

特集:UD+プロジェクト事例視 察実施報告 / 「IAUD 国際デザイン賞 2018」受賞紹介⑧ほか

一般財団法人国際ユニヴァーサルデザイン協議会
 事務局: 〒225-0003 横浜市青葉区新石川 2-13-18-110
 電話:045-901-8420 FAX:045-901-8417 e-mail:info@iaud.net